

はじめに

糟谷磯丸翁は「至誠一貫の翁」「純粹無垢」「天真爛漫」「歌の徳を体得した奇霊しき翁」など、その人柄や人物像が紹介され、老若男女、遠近を越えて神格化され尊敬された歌人です。

磯丸が生まれた伊良湖村は明治三十八（一九〇五）年、軍用地として国に接収されるまでは、伊良湖明神を中心とした宮山の北側から、現在の伊良湖ゴルフ倶楽部一帯にありました。村の移転時には一二四戸の主は漁業を営む民家が点在していました。

磯丸顕彰会は昭和六十三（一九八八）年十月発足以来本年度で三十五年を数えます。この間、磯丸翁の遺徳を顕彰する様々な活動を行ってきました。

特に平成二十四（二〇一二）年から二十七年の四年間を擁して展開した「糟谷磯丸生誕二五〇年記念事業」は、田原市内外の大勢の方々のご支援、ご協力のもと実施した事業でした。この事業の目的の一つは「糟谷磯丸銅像」の制作でありました。銅像は約七〇基の磯丸歌碑のある伊良湖岬灯台までの磯丸歌選歌碑群「いのりの磯道」の出発点に設置されました。

コロナ禍によって顕彰会活動の講演会、磯丸碑現地学習会などの集団学習が困難になってしまいました。会ではこの機に「まじない歌」の“どのような歌なのか”“読み方を知りたい”という皆様の要望に応えようと、一首一首に現代訳・解説を加え、『磯丸様のまじない歌』を刊行することにしました。

磯丸翁七十七歳のまじない歌に「疫癘除^{えきらいよけ}」と題する歌があります。磯丸が生まれて間もない明和六（一七六九）年に流行したはやり病は、稲葉風と呼ばれ、磯丸は生涯に九度ももの災難を経験しています。医者も薬もない日常がいかに困難で厳しかったかが伺えます。「まじない歌」は絶対で薬以上の効能があったのでしよう。

本書が磯丸翁のまじない歌を理解する一助になれば幸甚に存じます。

令和四年十二月

糟谷磯丸顕彰会 会長 岡田善広



糟谷磯丸肖像 君升田村彦画 天保8(1837)年 個人蔵

はじめに 2

漁夫歌人 糟谷磯丸 5
 天野 敏規 (田原市博物館学芸員)

民衆の願いを代弁する「まじない歌」 7
 安江 茂 (現代歌人協会会員、中部日本歌人会顧問)

磯丸略年譜 10

まじない歌 12

磯丸全集について 55

磯丸歌碑・ゆかりの地分布図 56

磯丸歌碑リスト 57

あとがき 58

漁夫歌人 糟谷磯丸

田原市博物館学芸員 天野 敏規

糟谷磯丸は、渥美半島の先端伊良湖村に明和元(一七六四)年五月三日に生まれ、嘉永元(一八四八)年五月三日に八十五歳の生涯を終えた漁夫歌人である。磯丸の生まれた伊良湖村は、陸軍伊良湖射場の用地拡張に伴い、明治三十九(一九〇六)年に全村が現在地へ移転するまでは、現在の伊良湖港にほど近い宮山のふもとにその集落があり、漁業を中心とした半農半漁の生活を営む村であった。

磯丸は、その名を新之丞、歌を詠むときには「磯丸」「貞良」と称し、通常は磯丸様と呼ばれていた。寛政六(一七九四)年、磯丸が三十一歳のときに父が亡くなり、母は長い間病気であった。親孝行の磯丸は、母の病気が早く良くなるように近くの伊良湖明神へ三年間毎日欠かさずお参りし、ついに母の病気は全快した。

磯丸が和歌というものに興味を覚えたのは、ちょうどこの頃のこと、伊良湖明神へお参りする旅人たちが神前にある奉納額などを見上げ、歌を口ずさむの聞き、その短い言葉(三十一文字)の中に不思議な魅力を感じたのがきっかけであった。磯丸は、もともと伊良湖に住む漁

師で、文字は書けなかったが、和歌の魅力に心を魅かれた磯丸は、やがて無筆の歌詠みとして知られるようになった。

この無筆の歌詠みのうわさは、隣村(現・田原市亀山町)に住む大垣新田藩主・戸田氏宥の家臣で、郡奉行であった井本常蔭の知るところとなった。この常蔭との出会いがその後の漁夫歌人糟谷磯丸の人生に大きな影響を与えた。常蔭のもとで、磯丸は熱心に和歌や文字の指導を受け、「磯丸」という名もこの常蔭から与えられた。磯丸は、常蔭を生涯「師の君」として敬慕した。



渡辺崋山筆「伊良湖明神」(『参海雜誌』複製)
 原本は天保4(1833)年 田原市博物館蔵

吉田(豊橋)に京都の堂上歌人芝山大納言持豊の門人で鍼医の林織江という女流歌人がいた。文化元(一八〇四)年、織江が伊良湖へ旅をした際に世話をしたのが磯丸であった。このときの紀行文『伊良古之記』には、珍しい男を見出し大いに興味を持ったことが記されている。

「海辺月 夏衣きてだにも見よ伊良古崎涼しき浪のよるの月影 是れなん新之丞の歌なり自らもうたよみてけるあだなをいらこ大納言とかや皆人言めり…」

このとき磯丸四十一歳。この織江の記した紀行文が後に織江の師匠芝山大納言持豊の目にとまり、やがて磯丸